

# 廣田神社神輿会

てんくかい

## 一天衢會

「天衢會（てんくかい）」という名前には、日本神話に由来する深い意味が込められています。「天衢」という文字は、『古事記』に記された「天之八衢（あめのやちまた）」に由来して名付けました。

これは、天孫・邇邇芸命（ににぎのみこと）が高天原（たかまのはら）から葦原中国（あしはらのなかつくに）へ天降ろうとしたとき、天と地を照らす神・猿田毘古神（さるたびこのかみ）と出会った場所とされます。猿田毘古神は邇邇芸命を導くため、まさにその「八衢（やちまた）」で待ち構えていたと伝えられています。

「八衢（やちまた）」とは、「八」は“多く”を意味し、「衢（ちまた）」は“道が交差し、分かれる場所”のこと。漢字としての「衢」も「四方に通じる道」を表します。つまり「天之八衢」とは、「天にある無数の分かれ道」「天と地をつなぐ、道が集まり分かれる交差点」のような意味合いを持っています。

また、『万葉集』や『日本霊異記』などの古典において、「ちまた」は人々が出会う場であり、異質なものが交差する“境界”の象徴でもあります。そこは、ただの通り道ではなく、内と外、神と人、聖と俗が交わり、新しい何か生まれる特別な場所です。邇邇芸命と猿田毘古神の出会いも、高天原の「天神」と地上の「国神」との邂逅であり、世界が動き出す重要な転換点でした。

さらに、「天之八衢」を天体（すばる＝プレアデス星団）に重ねる説や、大陸の古典『易経』などに見られる「天衢（天の道・雲の上の交差点）」との関連も指摘され、日本神話と東アジアの思想とのつながりを感じさせます。

こうした神話的、象徴的な意味をふまえ、「天衢會」は、

- ・ 多様な人々や価値観が出会い、交わる場所
- ・ 境界を越え、新しいつながりを生む場
- ・ 天と地、過去と未来をつなぐ道の交差点

としての役割を果たしたいと願い、この名を掲げました。

私たち「天衢會」は、日本神話の「ちまた」がそうであったように、人と人、思想と文化、時代と時代が出会い、導き合う“交差点”を現代にひらいていきます。